



2023年度



第7回 NUF&NUAS 読書コメント大賞

結果発表

-  **大賞** 雄牛さん 外大 世界教養学科
-  **最優秀賞** お好み焼きさん 外大 現代英語学科
-  **図書館特別賞** 文姫さん 学芸大 子どもケア学科
-  **出版会賞** おだんご侍さん 外大 現代英語学科
-  **優秀賞** (順不同)
- 28さん 外大 英米語学科
- 井谷さん 外大 世界教養学科
- 華さん 外大 英米語学科
- 柳さん 学芸大 子どもケア学科
- ハルイチナーさん 外大 世界教養学科
-  **いいね!賞** Anneさん 外大 国際日本学科
(一般投票)

第7回NUFS&NUAS読書コメント大賞について

名古屋外国語大学長・出版会長 亀山郁夫

今年で第7回を迎えたNUFS&NUAS読書コメント大賞。今回、受賞の対象となったのは、全応募120点より、第1次審査をパスした13点。例年とくらべ総じてレベルが高く、また対象とした選ばれた著作も、私たち名古屋外国語大学、名古屋学芸大学の学生の意識の高さを裏づける、きわめて内容性に優れたものばかりだった。選者の一人として誇りに感じると同時に、個々のコメントの巧みさに舌を巻く場面がしばしばあったことを率直にご報告しておく。

大賞に輝いた莫言『赤い高粱』は、群を抜くコメントだった。書き出しと締めいずれもプロの批評家はだしの、満点に近い出来栄である。論理構成がみごとな起承転結をなしている点も高評価の根拠となった。むろん、背景となる日中戦争に対する理解も十分に高いレベルに達していると感じられた。

最優秀賞は、綿矢りさ『かわいそうだね?』。大江健三郎賞に輝いた綿矢の代表作の一つだけに大いに興味を掻き立てられた。作品のみならず、コメントそれ自体も読みごたえのあるもので、恋する若い女性の内面をパラフレーズする文章の巧みさが、高評価につながった。図書館特別賞は、筒井康隆『残像に口紅を』。難解で知られるこの作品を必死に読み解き、そのインパクトや感想をそのまま言葉にしようという真摯さが印象に残った。出版会賞は永井玲衣『水中の哲学者たち』。哲学する、思考するという人間の営みをめぐる評者のコメントに説得力があり、著作をダイレクトに受け止める感性のしなやかに好感を持った。以上、コメント大賞四賞に限って選評を述べてみたが、選考結果は、あくまでも一つの偶然の産物だということ。選者の顔ぶれが変われば、それこそ受賞者の顔ぶれも変わったことだろう。来年もまた、一人でも多くの学生の参加を望みたい。他方、生成AIの爆発的普及という現実もあり、選者の目もよりいっそう厳しさを求められることになる。

恋と愛と戦争と……

第7回NUFS&NUAS読書コメント大賞に寄せて

名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館長
藤井省三

ミャンマー内戦、ウクライナへのロシア軍およびガザ地区へのイスラエル軍の侵攻と、現在世界各地が戦火に見舞われております。今年の入選作に多い戦争をめぐる本へのコメントを読みながら、改めて平和の尊さと難しさを噛み締めました。

大賞の『赤い高粱』は中国のノーベル賞作家莫言（モーイエン、ばくげん、1955-）の初期代表作です。雄牛さんの、本作は「単なる反日感情の扇動ではなく、「戦争」という状況下での人間の残虐さ、そして、その状況下で私たちがとるべき行動は何かという問いかけ」という指摘に深く同感いたします。

そのほか恋と愛と寄生虫と……というさまざまなコメントには、癒やされる思いを抱きました。最優秀賞受賞者の「お好み焼き」さんは焼き餅物語の『かわいそうだね?』に深く共感しておりますね——作者の綿矢りささんはこの夏に本学で講演※なされたとのこと、お聴きになりましたか？綿矢さんの新作『パッキパキ北京』は「漂泊北京的日本小資小姐[此` :プチブルおじょうさん]」系譜の傑作です。ぜひこれも読んでみて下さい。

中央図書館では外大出版会と協力して、亀山学長を委員長とする《世界の長編小説に挑む》委員会を立ち上げ、《若い読者のために、名古屋外大が選ぶ40冊》を選定しております。<https://nufs-up.jp/pickup/index.html> 読書ガイドとしてぜひ活用して下さい。

※「第18回 国際ドストエフスキー学会 — 『悪霊』の150年— 特別記念講演会」
日にち・会場：2023年8月27日（日）名古屋外国語大学 名駅サテライトキャンパス



『赤い高粱』 莫言（井口晃訳）

ペンネーム：雄牛（外大 世界教養学科）

私は思った。「作品の世界にのめり込む」とはまさに『赤い高粱』のような小説のことである、と。この小説では高粱畑が広がる中国山東省高密県東北郷に住む一家の物語が描かれている。作者莫言は、そこでの人の営みや殺戮、生と死を魔術的に表現しており、その非現実的な出来事があたかも自身の「実体験」として存在したことを疑わせない。この物語を通して私が感じたのは、単なる反日感情の扇動ではなく、「戦争」という状況下での人間の残虐さ、そして、その状況下で私たちがとるべき行動は何かという問いかけである。世界各地の「戦争」の話題が再び持ち上がる今日、私たちに求められる行動は「相手の気持ちに寄り添う」ことだろう。しかし、メディアを通して戦争を「間接的」にしか見ていない私たちが実際にその恐怖や残酷さを実感することは難しい。ならばいっその機に莫言が描いた世界にのめり込み、広い高粱畑に埋もれてみるのも悪くはない。



『かわいそうだね?』

綿矢りさ

ペンネーム：お好み焼き（外大 現代英語学科）

私が読んだ綿矢りささんの『かわいそうだね?』という本は、私に1人大切な友達が増えたような、いやもしかしたらこれは私の分身なのか、と読みながらそう思わせてくれるようなものでした。人を愛している時の己の醜さと葛藤があまりにも綺麗に文字化され、そのまま文中に書き表されていることに恥ずかしくなってしまうほどです。けれど、この醜くて綺麗ではないものこそ恋愛であり、自分の醜さが湧き出てしまえばしまうほどそれは本気の恋だったのだとこの本は私達を肯定してくれます。自分の醜さと対峙することは出来れば避けたいと皆が思うことですが、もしその醜さがむしろ美しさの結晶だったと知れば、これから先の自分への向き合い方が変わると思いませんか。



『残像に口紅を』 筒井康隆

ペンネーム：文姫 （学芸大 子どもケア学科）

章を重ねるごとに消えていく言葉と、人や物。

この小説では、はじめから「あ」という文字が存在しませんでした。それから徐々に、五十音のいずれかの音がランダムで消え、その音を含む人や物、そして記憶も同時に消滅します。

この小説が悲しいのは、消えたという事実は確かに認識できるのに、何が消えたかは思い出せず、残像だけがうっすらと残るところです。

私は特に、主人公の妻が主人公を呼ぶ時に、「もしもし」と声を掛けていた違和感が印象的でした。慣れ親しんだ優しい呼びかけの言葉は、もうこの世にないのです。

失ったものは忘れ、残ったものにすがりつく、この小説は虚構ですが、現実的でもあると感じました。

重要なコミュニケーションツールである言葉を制限された主人公が、様々な言い換えを駆使して生活をする。終盤、どのように物語を完結させるのか、主人公の挑戦から目が離せません。

皆さん、最後に消える文字は何だと思えますか？



『水中の哲学者たち』

永井玲衣

ペンネーム：おだんご侍（外大 現代英語学科）

人は思考することで強くなるのだろうか。
考えることで、知性が身につき、強靱な思考力が手に入るのだろうか。

考えれば考えるほど、一人ぼっちになるときがある。
ひとりよがりな強靱な思考は、他者を踏み入らせないほどの力を持ってしまう。

みんなで集まって思考する、哲学対話という試み。
著者の語りのなかでの哲学対話は意外なほど、ゆるやかに進んでいる。

むずかしい言葉は使われておらず、みんなで話し合える場所。
でもそれは生暖かいことではない。

私の考えが誰かによって崩されてしまうとき、弱くなって、不安になる。

なにかを守ろうとしてひとりぼっちになること、誰かに伝わったり、伝えてもらって嬉しくなること、対話には怖さと喜びが共存してある。

その厳しさのなかに、身を置くこと、そのなかでみえてくること。
そこに「私」や「あなた」がいることに意味がある。
そういう場所のなかで私は迷い続けたい。
私がひろがっていくことを受け入れたい。

優秀賞

『こゝろ』 夏目漱石

ペンネーム：28 (外大 英米語学科)

愛とはなんだろう。明確な答えは誰にどう聞いたって分からないと思う。私から先生へ、先生からお嬢さんへ、お嬢さんからKへ、そして、Kから先生へ。それぞれの形は違えどその全ては愛情だった。曲がり曲がって歪んでしまっても尚、そこには純粋な愛が確実に存在するのだ。

この『こころ』は、深い愛を持った人間がその愛の代償を抱え苦しみながらも生きるさまをありありと表現した作品である。これを読みおえる頃にはきっと、冷たくどろどろとした愛があなたの心を厚く覆うだろう。

愛憎という言葉があるように愛と憎しみは重なる。寧ろ、憎しみを持つ愛こそが純粋なものだと感じるほどだ。愛について考えたくなったあなたに、ぜひ読んでほしい一冊である。

優秀賞

『寄生虫を守りたい』 佐々木瑞希

ペンネーム：井谷 （外大 世界教養学科）

寄生虫と聞いてどのようなイメージを持つか当ててみせよう。

当然ネガティブなイメージだろう。

しかし貴方は寄生虫の魅力を知らないはずだ。

ロイコクロリディウムという種を例に挙げて紹介しよう。

特定の陸貝にしか寄生することが出来ず、鳥類に食べられなければ繁殖することが出来ない種。そのため、食べてもらえるように陸貝の体表で昆虫の幼虫のフリをして懸命にアピールする。

「貴方がいないと生きていけないの！貴方だけなの！」

「私をどうか召し上がって！」

といった風に健気で献身的な姿で取り入り、内側で自らの帝国を築く。

おお寄生虫、なんというファム・ファタールか。

本書の魅力は、多種多様な傾国の美女の解説だけでは終わらない。寄生虫の存在から、生物多様性や環境保全についても考える機会を与えるものとなっている。気持ち悪いと忌避せず、一度目を向けてみて欲しい。我々人類とて、彼女らのように、他者無しに生きられない存在なのだから。

優秀賞

『真夜中の動物園』 ソーニャ・ハートネット（野沢佳織訳）

ペンネーム：華（外大 英米語学科）

戦火を逃れたきょうだいが出り着いたのは、「真夜中の動物園」だった。さまよい歩くロマのきょう代いはさびれた動物園に出り着く。そこで出会った動物たちと会話をする。動物と話すだなんてファンタジーで、子どもが読む本じゃあないか！このあらすじを読んであなたはそう思ったかもしれない。しかし、この本は戦争の悲惨さ、そして人間の残酷さを炙り出す。虐げられた者たちの声聞こえる。なぜ無実の者が踏みにじられるのか。そういった疑問がわいてくる。私は考える。あなたは考える。なぜ戦争は起こるのか。なぜ戦争でなければならないのか。そして物語は進む。最後に、彼らは解放される。それが何を意味するのか。救いなのか。あるいは絶望なのか。ぜひあなたに考えて欲しい。不安定な社会情勢の中、戦争とはどんな形をしているものなのか。これを考えることはあなたにとってなにかの糧になるかもしれない。

優秀賞

『夏物語』 川上未映子

ペンネーム：柳 （学芸大 子どもケア学科）

若者は皆何者かになりたいと渴望し、自分が特別になれる何かを手に入れようともがく。その欲望を手っ取り早く叶える方法がある。親になることだ。

自分がいなければ生きることのできない命。子どもにとって親となった自分は間違いなく特別な存在だ。しかし、子どもという命を介在させることで自分が成り立つという感覚、それは合っているのか。必要とされているのは親としての自分で、私が満たされるという切望が叶うことはあるのか。何が人を親にするのか。死というものは取り返しのつかないものの代表と言えるが、生まれてくることもきつと同じくらい取り返しのつかないことなのだ。

当たり前とされている営為に疑問を持った私を救ってくれたこの本には、人間が生まれて、生きて、いなくなることのすべてが有る。その苦悶や感動もすべて。何者にもなれずもがきながら生きる、どこかの貴方へこの本の言葉たちが届きますように。

優秀賞

『レニングラード封鎖

： 飢餓と非情の都市1941-44』

マイケル・ジョーンズ（松本幸重訳）

ペンネーム：ハリイチナー（外大 世界教養学科）

レニングラード、革命の発祥地としてその偉大な革命家の名を冠したこの街は、1941年の独ソ開戦によって地上の地獄と化した。国境から刻々と迫りくる戦火の恐怖は、瞬く間にこの古都を「陸の孤島」へと変貌させてしまった。独ソ戦はヒトラーにより「絶滅戦争」と定義されたが、彼の地ほどこれを体現する場所はなかったであろう。爆撃、極寒、飢餓そして疫病。人々は家具で暖を取り、革靴を食み、人肉に手を出した。誰もが絶望した。しかし、希望はついに絶たれなかった。ある者は自らのパンを与え、ある者は舞台に演じ、ある者は曲を描いた。人々は人としての戦いを全うしていた。良心と文化を誇り、人々を鼓舞する使命に殉じる。劇の幕間に力尽きた役者を嘲笑う者はいない。本書は、戦争において銃を握らなかった人々の戦いの記録である。極限環境における絶望とそれに抗う人々の姿は驚嘆と感動の連続である。

いいね！賞（一般投票）

『中東：混迷の本当の理由 （池上彰の世界の見方）』 池上彰

ペンネーム：Anne （外大 国際日本学科）

一人暮らしの私の家にはテレビがない。新聞も取っていない。

イスラム組織ハマスがイスラエルへの攻撃を開始したと知ったのは、事件から1週間後だった。いかに情報から隔絶された生活をしているのか気づかされる。パレスチナ問題、ガザ地区、ジハード、、、世界史の授業で学んだ言葉は、今、現在進行形となって、悲惨な映像とともに海を渡って来る。しかし、いまいちピンと来ない。自身の無知に恐怖を抱き、この本を手にとった。

本書は、2000年以上の歴史を遡り、イスラム教の思想から現在の対立の原因までを分かりやすく紐解く。それは、中東のみならず、世界の国々・人々の思惑が複雑に絡まって捻れた結果であった。

「無関心でいることがいちばん怖いのです。」

閉鎖的で内向きな情報空間では薄れゆく、自分と世界とのつながりの意識。対岸の火事だと決め込んでいたら、飛んでくる火の粉に気づけない。まずは、知ることから。